

子どもと教職員に自信とやりがいを生むための学校評価

～次年度の教育活動に生かす学校評価・焦点化した指導と評価～

札幌市立屯田小学校 代表者 校長 荒川 巖

I はじめに

自信とやりがいを生む学校評価

1 本校における学校評価のねらい

学校には、3大行事や儀式、学習・生活習慣や基礎基本を定着させる取組、学校独自の伝統など、昔から変わることなく引き継がれ、これからも大切に守っていく教育課程の土台となるものがある。一方、急速に変わる国内・国際社会の影響から子どもや保護者の考え方や価値観、地域の社会環境が変化し、学校に求められるものも変わってきている。また、児童の実態や職員構成など、その時々事情から柔軟な対応が必要なこともある。

私たちは変わらぬ信念のもと、常に自らを変える用意と、時に素早く方向や対応を変える柔軟さの両面をもち合わせたいと考える。さらに、変わるために必要な勇気とエネルギーをいとわず、成果を目に見える形で教職員や児童・保護者と共有したい。そこに生まれる自信ややりがいが、学校や地域を育てていくことにつながると信じるからである。

本研究は、学校を柔軟に、そして力強く変化させるために学校評価が機能させることで、その結果や成果を共有し、関わった人たちに自信とやりがいが生まれることを目指して取り組んだものである。

学校評価のサイクル(PDCA)資料

2 昨年度の学校評価の結果をもとにした改善点

次年度の学校運営の具体的な共通目標を生み出すことを目指し、23年度後期学校評価の進め方を以下のように提案した。24年度の実践が共通目標を目指して進められることにより、子どもと教職員と保護者が成果を共有することにつながると考えたからである。

成果を共有する目標設定

1, 23年度後期学校評価の方法に対する考え方

学校重点目標「輝きと響き合いの学校」を目指して、子どもの姿で共通理解を図り、そのための教育活動をどう具現化していくか、改善策を探る。

評価項目の吟味

23年度前期中間評価(23.9.3)の考察結果

前期学年学級経営交流会(23.10.6)のまとめ

保護者アンケート(23.11)の結果と報告

課題を明らかにする

よい所をさらに伸ばす

新たな重点目標資料

評価項目の選定に当たっては、9月の「前期中間評価」後に校長より出された新たな重点目標『輝きと響き合いの学校』に結び付くことを柱に、検討課題と

なったことを項目として取り上げた。また、指導部主催で10月に行われた「前期学年学級経営交流会」において、具体的実践の中での子どもの姿や教師の悩みを項目に取り上げた。こうして、目標が子どもの姿の変容に結びつくよう、12月に評価項目を設定した。

具体的な取組

子どもの姿で共通理解を図る項目づくり

後期学校評価項目資料

24年度学級経営案資料

具体的な動きによる目標の共通理解

1 次年度に向けた検討項目の具体(後期学校評価項目)

2, 評価項目(抜粋)

- (1)朝の読書... ~ の中で、「もっと学校全体で読む時間としたい」「先生も一緒に読む時間にしたい」「時間がとれない」等の意見が出されている。
- (2)「花タイム」〔月・水・金に15分ずつ設けていた習熟の時間〕...
では帯の時間が有効に活用されているとの声がある一方、特に高学年での学習時間の増加から、時数確保の心配が出された。また、ドリルに時間がとられ、教科書の習熟が不十分であると言った声が出されている。
- (3)「朝の時間」... のまとめの中で、朝の時間、職員朝会があって子どもにつけない時にトラブルがあった、教師がいて朝の活動をすることが有効などの意見が出されている。
- (4)3つの「あ」の取組〔あいさつ・歩き方・後片付け〕... ~ の中で、よくなっているという声がある一方、不十分とする声もある。

2月10日の後期学校評価全体会を前にした1月25日、次年度の「学校経営案」が校長から示された。中間評価や各種アンケートを含めた学校評価と札幌市の教育方針をもとに、学校を「輝き」と「響き合い」の視点から見つめ、道筋を方向付けた。

2 共通理解された目標

前期の実践をもとに検討項目を吟味したことにより、それぞれの項目について寄せられた多くの意見も「子どもが輝き、響き合う姿」を具体的に描きながらの話合いとなった。そのうち主な改善点は以下の通りである。

(1)朝の読書の時間について

- ・1回増やし、火、木、金の週3回とする。
- ・全校の児童が静かに読む時間とし、担任も一緒に本を読む

(2)職員朝会について

- ・職員朝会を月・水・金の3回とする。

(3)読書環境の充実について

- ・貸し出しをボランティアだけではなく、中休みに図書委員会の児童も行うことができるようにしていく
- ・本がいつでも読める環境づくりについて、教務や司書教諭、開放図書の方々と話合う場を今年度中にもち、次年度までに実現していく。

(4)朝の活動

・月・水を「朝の活動」の時間とし、算数ドリルなど、学年学級ごとに工夫した取組を行っていく。

(5) 時数確保 - 日課表の改善 -

・花タイムをなくし、45分の授業を1コマつくる。

(6) 3つの「あ」（あいさつ・歩き方・後片付け）

- ・求める姿を共通理解する。
- ・月目標に3つの「あ」を入れる。

3 学校からの発信

各学年、特別支援学級で行われた年度末懇談会の機会に24年度の方針や具体的取組について学年ごとに説明をした。保護者に近い距離で反応を感じながら説明し、質問に直接、その場で答えることで共通理解を図った。その説明会には全校の7割の保護者に参加していただいた。



4 目標に向けた実践

(1) 読書に対する姿勢が変わった朝の読書の取組

全校が一斉に朝の読書に向かう姿は明らかな変容だった。「教師も一緒に読む」「予め本を用意する」という明確な目標による取組により、「時間になったらみんなが自然に読み始めるようになった」という声が教職員からたくさん聞かれるようになり、共通理解の大切さを実感することとなった。

(2) 職員朝会を減らして子どもと向き合う

火曜日と木曜日の朝は子どもと一緒に読書をするのが定着した。「落ち着く時間ができ、毎朝子どもの様子を見取る余裕ができてよかった」「朝の時間を大切にできてよかった」等、教師が子どもの体調や心の状態に、より注意を向けられるようになった。



(3) 開放図書ボランティアとの協力関係構築

これまで図書貸し出しは開放図書ボランティアのみで行っていた。学校評価の中で読書環境の充実の必要性が認識され、子どもにとってより身近な図書館

24年度に向けた学校説明会資料

子どもの変容が共通理解を深める

関係機関との連携が変化を加速させる

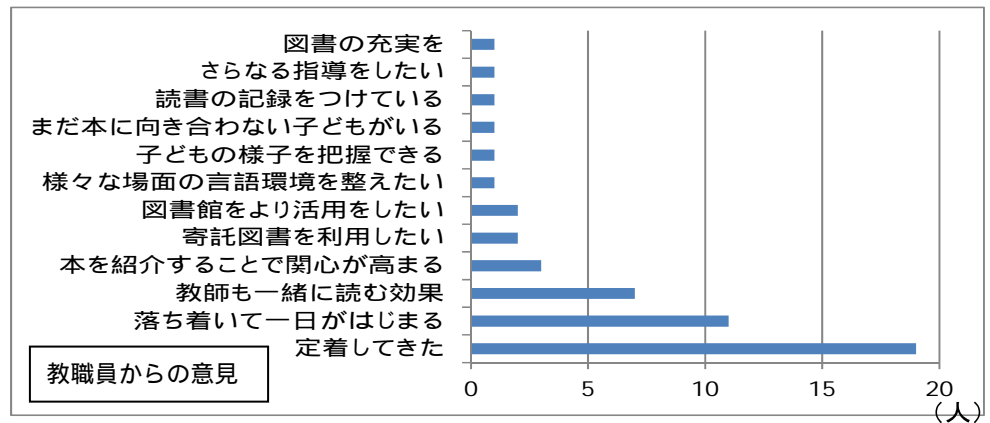
に変えていく方向が確認された。その取組の一つとして開放図書司書やボランティアの方々の協力を得て、図書委員の児童が貸出業務をしたり、図書フェスティバルで児童がボランティアの代わりに読み聞かせを行ったりするなど、子どもが図書館運営により参加できるようにしたところ、図書館を利用する子どもが確実に増えてきた。

成果と課題

子どもの姿を通して
せいかの共通理解

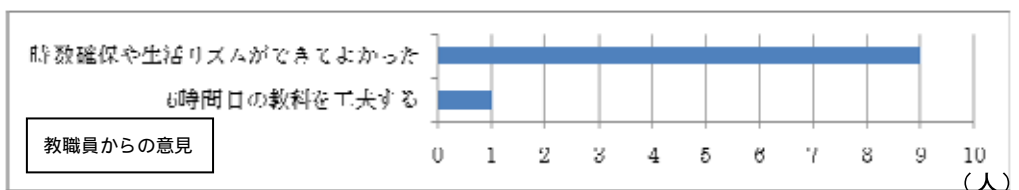
1 24年度前期中間評価に表れた子どもの姿の変容

学びに向かう心を整え、心が動く時間「読書タイム」について



朝の読書を含めた図書館活用の取組について「一日の始まりが落ち着いている」「学校全体で浸透している」「子どもたちの様子を把握することができるようになった」など、ほぼ全員が成果を認めている。子どもの様子を参観いただいた評議員の方々には「学力向上の手がかりとなる」との意見をいただいている。

花タイムをなくした日課表の改善や欠時の振替などによる時数の確保について



花タイムをなくし、日課表に1時間を新設したことについて、「授業の進度に余裕ができた」「日課表の改善により生活リズムが一定になり、安定したものになった」など、手応えを感じている声が多い。保護者アンケートをきっかけに検討したことを、日課表の工夫という形で実現し、共通理解によって子どもの姿に反映できた例である。

学校評価の取組
が個々に向き合
う目を磨く

2 24年度後期に向けての課題

成果の一方で、一方、個に応じた指導について、課題として捉える意見が多かった。複数の目で子どもを見とること、少人数指導やT・T、指導の工夫、基礎基本の定着等、今後取り組む方向性が見えてきた。また、道徳の授業につい

自信とやりがい
につながる学校
評価

でも課題と捉える意見が多かった。

副読本の活用、道徳の授業の工夫、研修の必要性等、すぐ
に実現可能な事項も多かった
ため、2月に他校の指導者を講
師として招き、道徳の研修会を
行うこと等で、子どもの変容や
変化の実感をつかんでいきたく
と考えている。

後期に向けての課題には、個
々の学習や心に向かう内容が多
い。学校評価を活用した改善の
取組によって、子ども一人一人
をより捉えようとする方向に目標
が向いてきているのかもしれない。

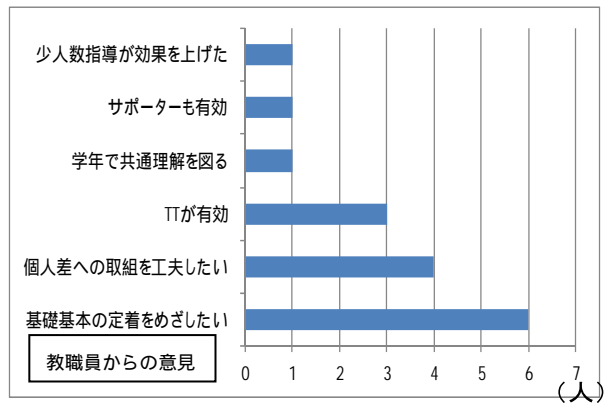
3 終わりに

これらの実践を通して一番変
わったことは教師の意識であり、
教育活動の成果や課題を子どもの
姿から離れずに語ることが徹底さ
れるようになった。以下は、学校評価の記述欄に書かれた教職員の声である。

「それぞれの担任が『輝きと響き合い』の一つの目標に向かって取り組む姿勢
が感じられた。子どもたちに意欲的に学ぼうとする姿が多く見られるよう、自分
も尽力していきたい。」「先生方の前向きな意識・姿勢が子どもたちの学ぶ意欲
にダイレクトにつながっていることを感じます。」「年齢・経験にかかわらず、
どの教職員にも学ぶべき所があり、お互いに尊敬しあって協働していると思いま
す。」

このように、一人一人が学校評価の取組を通して変化を実感すると共に、自
分も評価者の一員であることを自覚しつつあると思われる。年度末に向け、保
護者や外部からの評価を受け、子どもたちも教職員も自信とやりがいをもてる
よう、今後も実践を進めていきたい。

学ぶ力の育成に向けて



豊かな心の育成 ~道徳の授業を大切にする~

